

C-4

ブヌン語巒社方言の疑問詞末尾に生じる q

野島本泰 (近畿大学・非常勤)
nojima.motoyasu@gmail.com

キーワード：ブヌン語，オーストロネシア語族，疑問詞，不定指示，記述言語学

要旨

本発表は、ブヌン語（オーストロネシア語族，台湾）巒社方言の疑問詞末尾に現れる q を考察し，次の 3 点を主張する：

- (A) 巒社方言の疑問詞は節の先頭にしか現れず，-q は疑問詞の直後にのみ現れる。
- (B) 巒社方言の疑問詞は，-q と共起すると疑問の意味を表すが，同一節に -q がないときは不定指示を表す。
- (C) -q は，疑問詞語根の一部ではない。接尾辞である。
この 3 つは次の 2 つの意義を持つ。
- (D) -q は疑問詞語根の一部ではなく，別の形態素である。したがって，オーストロネシア祖語の疑問詞を再構する際，巒社方言の -q は無視してよい。
- (E) 世界の数多くの言語に，「疑問詞に何かが付いて不定代名詞が派生する」という向きが見られる。その逆の向きの派生は稀であるか，例がないとさえいわれる。しかし，-q がもし接尾辞ならば，ブヌン語巒社方言はその逆向きの派生を持つ，極めて珍奇な例だといえる。

1 問題のありか

ブヌン語（オーストロネシア語族，台湾）諸方言の疑問詞を比較すると，中部方言群のみが末尾に q を持つことがわかる。表 1 に，疑問詞の一部を示す。

表 1：ブヌン語 5 方言の疑問詞

	北部方言群		中部方言群		南部方言	南島祖語における再構形		
	卓社方言	卡社方言	巒社方言	丹社方言	郡社方言	Tsuchida	Blust	Wolff
誰	cima	cima	simaq	simaq	sima		*ima	
何	maaz	maaz	ma'aq	maaq	maaz			
幾つ	pia	pia	piaq	piaq	pia	*pijaH ₂	*pijax	*piga
何人	papia	papia	papiaq	papiaq	papia			
どこ	ica	ica	isaq	isaq	isa			
いつ	lakua	lakua	laquaq	laquaq	lakua			
どんな	ma-kua	ma-kua	ma-quaq	ma-quaq	ma-kua		*kuja	*kuga
なぜ ¹	kua-cuna	kua + cuna -via	-via	-via	-via			

李壬癸は 'It is not clear why /-q/ turns up only in the central dialects' と述べている(Li 1988:481)。q が中部方言群にのみ現れることのわけをなぜ問うのか？その問いの背景にはブヌン語の方言分岐の歴史がある。ブヌン語は，《北部・中部》と《南部》とがまず分岐し，そのあとで《北部》と《中部》が分岐

¹ 巒社方言の，理由を尋ねる疑問文は，形態・統語的に，その他の疑問詞疑問文とは異なる。意味的にも，理由を明らかにしようとするというよりはむしろ事態の不思議さを語るものであるように感じられる。そこで，文法上は疑問詞疑問文の範疇から外れると解釈する。疑問詞疑問文と呼ばれるものの中で「なぜ」だけが特殊な振る舞いをする現象は，世界の諸言語に散発的に見られる(Nojima 2009)。

した。音韻的にも語彙的にも《北部》と《中部》が近く、《南部》はその2つと共有する特徴が少ない(Li 1988)。そのため、《中部》にのみ q が現れる状況は説明を要する問題なのである。例えば、規則的な対応どおりなら、中部方言群で「いくつ」は pia となるはずである。しかし、実際は piaq である。表 2 を参照。

表 2：ブヌン語 3 方言群と南島祖語の音対応

	北部	中部	南部	南島祖語(Blust)
(1) 「家」	lumaq	lumaq	lumah	*Rumaq
(2) 「父」	tama	tama	tama	*amax
(3) 「幾つ」	pia	piaq	pia	*pijax

では、中部方言群の疑問詞末尾に現れる q はいったい何者なのか？この発表では、発表者の集めた一次資料²に主に基づき、先行研究の資料も援用しながら、この -q に関して次の A から C を示す：

- (A) 巒社方言では、疑問詞は節の先頭にしか現れず、-q は疑問詞の直後にのみ現れる。
- (B) 巒社方言の疑問詞は、-q と共起すると疑問の意味を表すが、同一節に -q が共起していないときは不定指示を表す。したがって、-q は疑問の意味を添えている。
- (C) 巒社方言では、疑問詞語根と -q の間に接尾辞が介在しうる、したがって、q は語根の一部ではない。また、疑問詞の直後に付着してその外側に接尾辞がつくことがある。したがって、q は接尾辞である。

2 ブヌン語巒社方言のスケッチ

●音韻と表記：巒社方言の子音は p, b [pʰ], v, m, t, z [ð], d [dʰ], n, s, l, k, q, ng [ŋ], h, ' [ʔ] の 15 個。子音 s は音節核音 i の前後で口蓋化する。母音は a, i, u の 3 つ。母音には長短の区別がある。本稿では、長い母音は同じ母音を 2 つ並べて表記する。

●形態法：膠着語的。(a)接辞付加。(b)重複。(c)複合。この 3 つを用いる。

●統語法：

●述語が節の先頭。その他は述語に後続するのが基本。

- (1) m-u-liqliq a vaqun.
 AF-INTR-tear NOM trousers
 「ズボンが破れた。」

●平叙文：音調は文末で下降。

- (2) dusa'=nak sangan kaun-un izuk.
 two=POSS.1SG a.while.ago eat-PF orange
 「私はさっき 2 つミカンを食べた。」

² 5 つの方言は次の地点で調査した：(a)卓社方言：南投縣信義鄉地利村。(b)卡社方言：南投縣信義鄉地利村。(c)巒社方言：南投縣信義鄉明德村および望美村望郷。(d)卓社方言：南投縣信義鄉地利村。(e)郡社方言：高雄市那瑪夏区，台東縣海端鄉霧鹿村，南投縣信義鄉明德村。本発表で用いるデータは、特に記載のない限り発表者が調査で得たものである。

- (10) **papia-q** amu tu (11) **mun-'isa-q** asu.
 how.many.people-Q NOM.2PL SFP go-where-Q NOM.2SG
 「あなたたちは何人ですか？」 「あなたはどこへ行くんですか？」

- (12) **laqua-q** asu sai-haan laipun.
 when-Q NOM.2SG went.to Japan
 「あなたはいつ日本に行きましたか？」

- (13) **maqua-q** su a tama tu.
 how-Q POSS-2SG NOM father SFP
 「あなたのお父さんはどんな (人) でしたか？」

一方、理由を尋ねる疑問文（「何故」）には **-q** はつかない(***maivia-q**)。

- (14) **maivia** su sangan tu dusa' kaun-un i'.
 why POSS.2sg a.while.ago COMP two eat-PF SFP
 「あなたはさっきなぜ2つ食べたんですか？」

一方、疑問詞が不定指示で用いられる場合、**-q** は現れない（例文 15, 17, 18）。

- (15) **nii haip papia.** (例 10 と対照せよ)
 NEG today how.many.people
 「今日は何人もいない (人数は少ない)」

- (16) **min-maa-q.** (17) **nii tu min-maaz.**
 become-what-Q NEG COMP become-what
 「何になるの？」 「何にもならない (役立たずだ)」

譲歩節の中では、**-q** は現れたり、現れなかったりする。例(18), (19)を対照せよ。

- (18) **al-tupa tu mun-'isa ka, tamuhung-an saak.**
 CTF-say.AV COMP go-where CONJ hat-LF NOM.1SG
 「どこへ行くのにも、私は帽子をかぶります。」

- (19) **al-tupa tu mun-'isa-q a, tamuhung-an saak.**
 CTF-say.AV COMP go-where-Q CONJ hat-LF NOM.1SG
 「どこへ行くのにも、私は帽子をかぶります。」

疑問詞に接尾辞が付き、そのさらに後ろに **-q** がつくことがある。次の例(20), (21)はそれを示す。

- (20) **kali-'isa-u-q ma-ludaq tu.**
 hit-where-PF-Q AF-hit SFP
 「どこを叩かれたの？」 (Lit: “どこ叩き” されたの?)

- (21) **ku-ma'az-a-q** (張玉發 2016: 111)
 use-what-LF-Q
 「何を使ってやったの？」 (Lit: “何使い” したの?) 原文の訳「用甚麼方法」

以上から、q は語根の一部ではない。疑問詞の直後に付着して疑問の意味を添える、一つの形態素だと考えられる。

q が形態素であるとする、ではどんな形態素だろうか？接辞だろうか？接語だろうか？これを考える上で面白いのが張玉發(2016)という語彙集で、例(20), 例(21)が並べてある。例(22)では、疑問詞にまず -q が後続し、その後ろに接尾辞がついている。

(22) ku-ma'a-q-an (張玉發 2016: 111)

use-what-Q-LF

「何を使ってやったの？」

このことは、-q が巒社方言ではすでに接尾辞化していることを示唆している。さらにもうひとつ、-q が巒社方言ではすでに接尾辞化していることを示唆する事実として重複が挙げられる。例(23)は重複前の形、例(24)は重複後の形で、-q が重複の入力の一部となっている。

(23) ma-ku-ma'a-q (張玉發 2016: 137)

AF-use-what-Q

「何を使うの？」(原文の訳「用甚麼東西?」)

(24) ma-ku-{ma-q}~{ma'a-q} (張玉發 2016: 137)

AF-use-{what-Q}-{what-Q}

「いつも何を使っているの？」(原文の訳「常常用甚麼?」)

巒社方言では、「自立語+接語」が形態論的重複の入力になることはない。したがって例(24)は、q が疑問詞内部にすでに取り込まれている(つまり接尾辞化している)ことを示唆している。

以上から、-q は接尾辞である(接語ではない)と見なすのがよいだろう。

5 結論

本研究で、上記 A から C が明らかとなった。この 3 つは 2 つの意義 D, E を持つ。

(D) オーストロネシア比較言語学への貢献

Blust and Trussel は、オーストロネシア祖語に *pijax 「いくつ」を再構しているが、その注でブヌン語中部方言群の -q について「不可解だ(puzzling)」と感想を漏らす。そして、「他の言語が末子音を保っているのに、(この q は) 変だ(at odd)」と述べている。

しかし、本発表で示したように -q を「疑問詞の末尾に付着して、疑問の意味を添える形態素」だと考えれば、巒社方言の疑問詞語根も末尾には q は持たないことになる。それにより、オーストロネシア祖語やブヌン祖語の疑問詞を再構する際に巒社方言の q は無視してよいことになる。Blust and Trussel は、"it seems best to posit PAn *pija, and assume that both Bunun pija and Itbayaten pirah have added a final consonant through some unknown historically secondary process." と述べているが、本研究によりその「プロセス」の正体が初めて明らかになった。

(E) 博言学・言語類型論への貢献

「疑問代名詞に何か加わって不定代名詞が派生する」という向きの派生は相当数の言語に見られる(橋本 1981:35ff, Haspelmath (1997:170ff), Bhat (2000, 2004: 226-249), Dixon (2012: 404) など)。その逆の向きの派生は例がない、Dixon (2012: 404)はそうとまで言い切っている。一方で、Bhat (2004: 238-240)は、§10.2.4 Derived interrogatives の中で、逆向きの派生を示す言語として 9 言語を報告している。

中部方言群の q が(接語ではなく)接辞であるならば、通言語的には稀な、逆向きの派生がこ

の方言には認められることになる。

(F) **-q, そして奇妙な「逆向きの派生」はどのような経緯で生じたのか：一つの想像**

北部の2方言にはともに助詞 **qa** がある⁴ (小川・浅井 1935: 645, Tsuchida 1988, Moriguchi 2007: 206, 全茂永 2011: 110, 115)。一方, 中部方言群のもう1つの方言である丹社方言もまた, **-q** を持つ (Li 1988, Tsuchida 1988, De Busser 2009⁵など)。

北部2方言 (=卓社方言, カ社方言) の助詞 **qa** と, 中部2方言 (=巒社方言, 卓社方言) の **-q** は似ている。次の3点が似ている⁶。

(甲) 分布: 疑問詞の直後 (つまり節の第2位置) に現れる。

(乙) 形: 子音 **q** を含む。そして拘束形態素である。

(丙) 形態音韻上の振舞いが似ている。**ma'az** 「何」に付き **z** を落とす (例7)。

この驚くべき類似から, 北部の **qa** と中部の **-q** は同源である可能性が高い。

そうしてみると, 「逆向きの派生」が生じた経緯は次のようなものだったのではないか: (I)元来は一つの形が疑問と不定の両方を表していた。つまり疑問詞は不定疑問語だった。(II)疑問と不定指示を区別するために, 助詞 **qa** が不定疑問語に付着し, 疑問であることを積極的に表すようになった。その付着は随意的なものだった。(III) 北部と中部が分岐し, 北部は **qa** を保持し, 中部では **qa** は **-q** に変化した。(IV) 中部では疑問詞疑問文での **-q** の使用が義務的になった。そして, 不定疑問語に付着している **-q** が接尾辞化した。(V) 不定疑問語は, 疑問では **-q** を伴い, 不定指示では伴わない, そういう「真性」派生疑問詞」とでも呼べる珍奇な状態が生じた。

略号一覧

AF: agent focus (動作主焦点)

CONJ: conjunctive (接続詞)

INTR: intransitivizing prefix (自動詞化接頭辞)

NEG: negation marker (否定辞)

PF: patient focus (被動者焦点)

POSS: possessive case (所有格)

SG: singular (単数)

COMP: complementizer (補文標識)

CTF: counter-factuality marker (反事実標識)

LF: location focus (場所焦点)

NOM: nominative case (主格)

PL: plural (複数)

SFP: sentence-final particle (文末助詞)

参考文献

Bhat, D.N.S. 2000. The indefinite-interrogative puzzle. *Linguistic Typology* 4: 365-400.

Bhat, D.N.S. 2004. *Pronouns*. Oxford University Press.

Blust, Robert A. 2003. *Thao Dictionary*. Institute of Linguistics, Academia Sinica. Monograph Series A5. Taipei: Academia Sinica.

Blust, Robert A. and Stephen Trussel n.d. *Blust's Austronesian Comparative Dictionary* [Available at: www.trussel2.com/acd/; accessed 20 August 2019].

⁴ 隣のサオ語 (オーストロネシア語族) には, 疑問助詞 **qa** がある (Blust 2003: 757)。Blust and Trussel は, オーストロネシア祖語に ***qa** を再構している。

⁵ De Busser (2009)は丹社方言の記述であるが, 形態素 **-q** を析出してはいない。たとえば, 語彙集で **piaq** "how much, how many" の語根を **piaq** とする (p.611)など, **q** を含めた全体を語根としている。

⁶ 南部方言は **bis** を持ち, これが **qa, -q** と似た機能を持つ (野島 2015)。

- 全茂永. 2011. 「卡社布農語複合詞結構」國立新竹教育大學碩士論文.
- De Busser, Rik L. J. (2009) Towards a grammar of Takivatan Bunun: Selected Topics. Unpublished PhD dissertation, Research Centre for Linguistic Typology, Faculty of Humanities and Social Sciences, La Trobe University.
- Dixon, R.M.W. 2012. Basic Linguistic Theory. Vol.3. Oxford University Press.
- 橋本萬太郎. 1981. 『現代博言学』. 大修館書店.
- Haspelmath, Martin. 1997. Indefinite Pronouns. Oxford University Press.
- Jeng, Heng-hsiung [鄭恒雄]. 1969. A preliminary report on a Bunun dialect as spoken in Hsinyi, Naut'ou, Taiwan. Mimeo. Taipei: National Taiwan University.
- Jeng, Heng-hsiung (ed.) 1971. A Bunun-English Dictionary. Mimeo. Taipei: National Taiwan University.
- Jeng, Heng-hsiung. 1977. Topic and Focus in Bunun (Institute of History and Philosophy Special publication 72) . Taipei: Academia Sinica.
- Li, Paul Jen-kuei. 1988. 'A comparative study of Bunun dialects'. Bulletin of the Institute of History and Philology 59.2, pp.479-508. Taipei: Academia Sinica.
- Moriguchi, Tsunekazu [森口恒一]. 2007. Northern Bunun Texts No.2. 森口恒一 [編] . 2007. 「台湾・北部フィリピンの少数民族の口頭伝承に関する言語学的・人類学的調査研究 研究成果報告書」(平成15年度～18年度 科学研究費補助金(基盤研究B))
- 二宮力(編) 1932. 『戀蕃ブヌン語集』台中州警務部.
- Nojima, Motoyasu [野島本泰]. 2009. Two types of content questions in Central Bunun: Why is Via "Why" different? Eleventh International Conference on Austronesian Linguistics. France: Aussois.
- 野島本泰. 2015. 「ブヌン語南部方言の第二位置疑問小詞 bis」大西正幸・千田俊太郎・伊藤雄馬(編) 『地球研言語記述論集』7: 151-169.
- 小川尚義, 浅井恵倫. 1935. 『原語による台湾高砂族伝説集』東京: 刀江書院.
- Tsuchida, Shigeru [土田滋]. 1976. Reconstruction of Proto-Tsouic phonology. Tokyo : Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo Gaikokugo Daigaku.
- Tsuchida, Shigeru. 1988. Comparative word lists of Bunun dialects. Report of the research carried out in 1983. Unpublished manuscript.
- Wolff, John U. 2010. Proto-Austronesian phonology with glossary. Cornell Southeast Asia Program Publications.
- Wu, Peter A. 1969. A descriptive analysis of Bunun language. A long-term paper submitted for Graduate School of Georgetown University.
- 張玉發 [Manias Istasipal] (編) 2016. 『戀群布農語簡易詞典』一串小米族語獨立出版工作室.